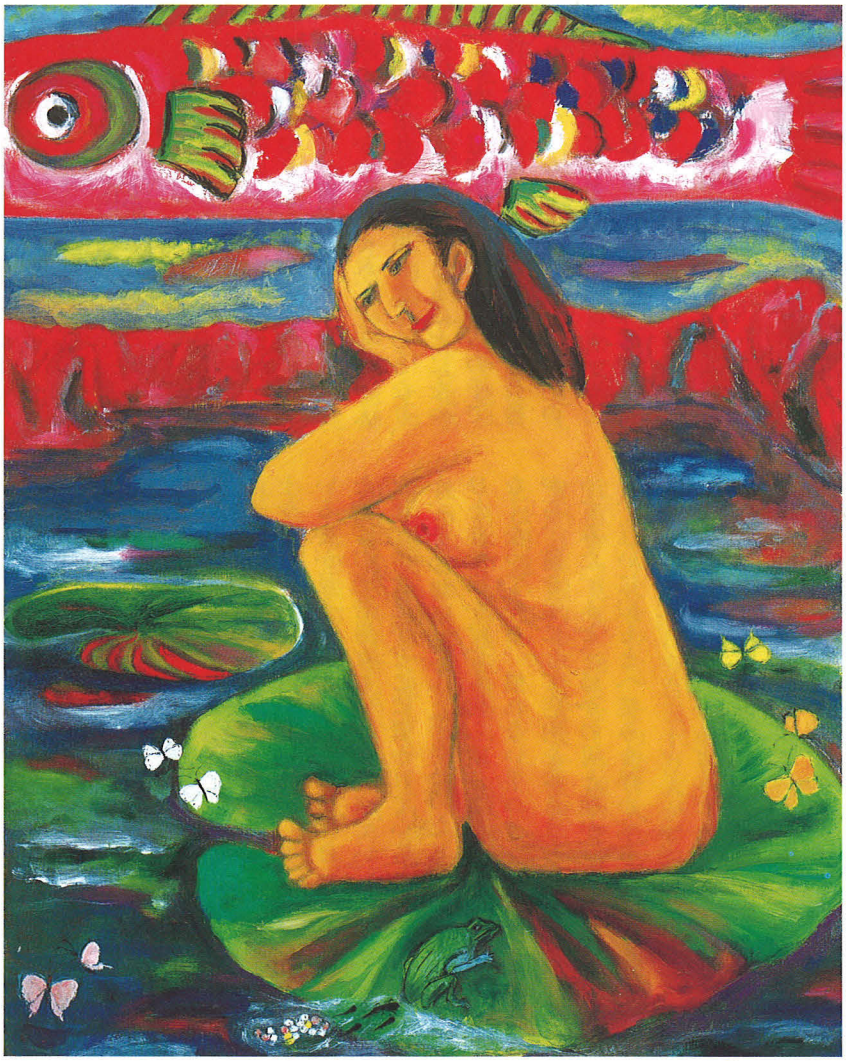
子どもから大人、若者から高齢者に至るまでのすべての人の文化を

文化高知

2002年5月　NO.107



「森のビーナス」　藤田京子

〈もくじ〉

面映ゆい日課……島総一郎　2
公文式普及こぼれ話……武市　功　3
文化について……西澤邦輔　4～5
第十二回高知出版学術賞　審査と受賞作品について……中内光昭　6～7
ドイツの娯しみ――「音」編……塩見由利　8～9
これから須崎がおもしろい!～鍋焼きラーメン快走記～……徳久和宏　10～11
エスコーターズ日記in文化高知……田子絵子　12
総合表現と私……川田弘人　13
風俗歳時記・風伯……14～15

(財) 高知市文化振興事業団

面映ゆい日課

島　総一郎

もともと、私は自宅にいても家事にたずさわることは、ほとんどなかった。公務員同士の共稼ぎとあって、妻への気遣いはあったものの、台所仕事、掃除、洗濯などはいたって苦手だった。いつも不満の声を耳にしていたが、それでも家事はもっぱら妻に任せっぱなしだった。

やがて、私の方が三年早く定年退職したが、そのとき、思いがけない異変が起きた。

早朝、あわただしく出勤の準備をしていた妻から、せめて朝食の支度でもしてくれないかと、ねだられたのだった。予期しなかった頼まれ事に当惑した。私はしぶしぶ台所に立ち、味噌汁づくりや卵焼きの手ほどきを受けた。初めから巧くはできなかったが、日々、事に当たるうち、少しずつ腕も上がっていった。朝食のあとの茶わんや皿を洗うのも私の仕事となった。

三年経つと妻も退職したが、不思議なことに、習慣づいた事はもうやめられなかった。それに、年季が入って台所仕事が手慣れたものとなり、味付けさえも自慢できるほどになっていた。毎朝の食べ物を自らの手で作ることの楽しさも、すっかり会得していた。今では妻も安心して朝の台所を私に任せ、その間、せっせと庭の掃除などしている有り様である。

私が手がけたものは、台所仕事だけには終わらなかった。いつの間にか、夕食の準備にスーパーマーケットへも出かけてゆく羽目になっていた。始めは妻に同伴して食品選びのこつを教わったが、ほかの男など来ているだろうかときょろきょろし、恥ずかしい気持ちで店内に足を踏み入れたことだった。

しかし、これも案じることはなかった。ネクタイをした勤め帰りの紳士や茶髪の若者たちが買い物をしている姿が見えた。常連らしいくだけた恰好の老若男女もいっぱい来ていた。どの食品がどこに置かれているか、その場所もすぐ飲み込めたし、ひとりで出かけても何ら困ることはなくなっていた。慣れない手つきながら、籠を手にして店内を歩きまわってみた。ふと、ほかの男と顔が合い、互いに口もとへ笑みを浮かべることもあった。

食品に対する好奇心もどんどん旺盛になっていった。栄養価の高い食品はどれ？　老化を防ぐには何がいいのだろう。さてさて値段の安いものは？　夕刻には値引きの時間帯があることも――。思いはエスカレートし、食い物は大事だ！　体力の源は食事にあるのだと、自分自身に言い聞かせたりする始末だった。

スーパーマーケットは自宅の目と鼻の先にある。だから、着替えなどせずラフなままの恰好で、突っ掛け履きで駆け込んでいく。このごろは男の買い物客もずいぶん増え、違和感などまったくなくなった。店内には、うきうきする軽快な音楽が流れている。リズムにのせられながら通路をめぐり、目ぼしい物を見つけては、さっさと籠に入れていく。顔見知りの近所の人にもよく出合う。おやっと言って立ち止まり、しばし話が弾むこともある。

好みの物を買い込むと、レジを通り、一つ一つビニール袋に入れる。それを手にぶら下げ、夕刻の裏道を家路につく。〝帰ったら一風呂浴びて、仕入れたものを肴に一杯やろうか〟などと思いながら――。

（しまそういちろう／写真家・エッセイスト・高知市仁井田在住）

公文式普及こぼれ話

武市　功

私が中学生の頃、プロ野球がセ・パ両リーグに分かれた。当時まだテレビは日本になく、高知では一円五十銭のスポーツ新聞とラジオが唯一のプロ野球情報源だった頃、突如球団数が約二倍になった。

そのお陰で新球団としてパ・リーグに参加することになった『毎日オリオンズ』の発足キャンプを「高知市営球場」で見ることができた。毎日放課後に別当や新巻を見に行くうちにだんだん野球狂になっていった。

それから三年後には山本投手・永野捕手の土佐高校が夏の甲子園を「全力疾走」を看板に準優勝で飾ったが、その感動は今もはっきり覚えている。

私はそんな少年時代を高知で送ったが、卒業後は大阪でいったん化学会社に就職、十三年間勤めた。その後縁あって母校、土佐高校での恩師〝公文公〟先生が創立された「公文教育研究会」に入り、公文式という一種の学習塾チェーン統括本部の経営と日本並びに海外の普及を担当したので、そこでの思い出の一面を綴ってみたい。

高知ではそんなに珍しくない公文姓だが、当初は県外ではなかなか「クモン」とは読んでもらえずコーブンはまだ良い方で、当時の社名「公文数学研究会」を間違って「クモノスケンキュウカイ」ですか等の電話もときにはあった。

もっと読みやすい社名ならと当時は思ったものだが、国内の生徒数が百四十万人の今考えると、一度覚えると忘れられない名前の方がかえって良かったかと思える。

この『公文式』はむしろ合理性を尊ぶ外国の方でより理解されるはずとの考えから、二十五年前から海外普及を開始し、今では外国人の、主として子どもたち百三十万人が学習するようになった。その受け入れられ方から見て、間もなく外国の学習者が日本国内の学習者数を上回ることは間違いない。

日本から各種産業のハードウエアは多く輸出されているがソフトウエアの輸出は極めて珍しく、これが高知発である点特筆してよいと思う。

日本で最初の頃はなかなか「クモン」と読んでもらえなかったように、外国でも「公文」でおなじような苦労もした。

漢字の国「台湾」では「公文」は公（おおやけ）の文、すなわち官のものと解釈されるので使えず、やむなく発音の最も近い『功文』として「コンモン」と読ませている。

また、ポルトガル語が国語のブラジルでは「ク」は肛門の意味になり嫌がられるとはじめに注意されたが、前後関係から誤解されることはないとの考えでこのまま使って、今はまったく問題なく通用している。

クモンが外国語の中に入ったとき、どこの国の言葉でも一般に発音はしやすいようでこの点では助かっている。

今では『ジュク』がジュウドウやタタミと同じく諸外国でそのまま通用するが、二十数年前には塾のない多くの国（台湾、韓国以外）ではその概念が理解されず、進出の届を官庁に出すときの説明に苦心していた。

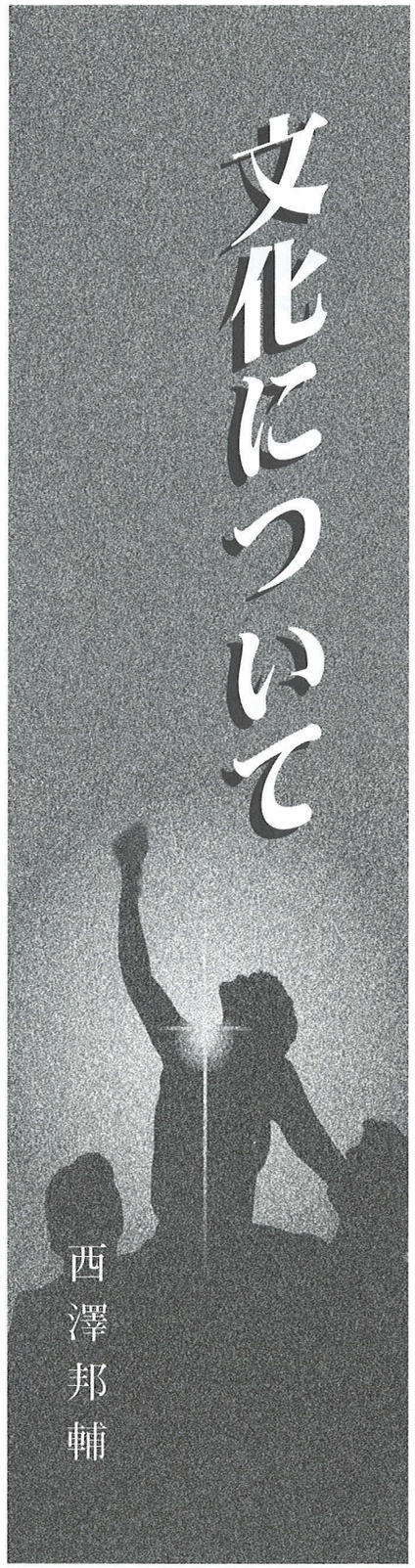
学校があるのに何故それ以外のものが必要かと言われる。どの国でも「外国語教室」はあるので、ドイツ進出のとき外国語教室の数学版ですと説明するとすぐ理解されたので、その後はその手で上手くいくようになった。

それぞれの国の法解釈にも国柄が出る。台湾では法律にないから許可できないと言われ、ブラジルでは法律にないので自由にやれとの返事をもらった。

こんなことを繰り返しながら私自身定年を迎えたが、振り返るとそれぞれ懐かしい。私は他人のやらないことをやるのが好きで、この道は合っていたと思っている。

（たけちいさお／公文教育研究会相談役）

文化について



西澤邦輔

一　文化と平和

一

五十七年前の日本敗戦後、津々浦々に、辛うじて生き残った若者たちがぞくぞく復員帰省した。それに、戦災で焼け失せた都会に帰れない疎開者がまだ多く残っていたので、田舎の町や村には若者とその活気が溢れていた。食べるものも娯楽も乏しかったので、興味と活動を求めて至る所に「文化会」なるものがぞくぞく誕生し、文学・哲学・短歌・俳句・合唱・レコード鑑賞等々、何でも「文化」と言えそうなことを集まってやり始めた。それは数年ならずして、若者が田舎から退潮するとともに消えてしまったが、十代後半の感受性豊かな時にそのような経験をしたことは、私の人生において画期的な意味を持つものであった。

「文化」は「平和」とともに、戦後の流行語の最たるものであろう。それだけに、それが実際に意味する内容も甚だ多様で、当然のことながら無反省に使用されることも多かった。私の場合、特に「文化」について反省を強いられるようになったのは、それから数年後、学生時代の最後の頃、アルバート・シュヴァイツァーの「文化哲学」との偶然の出会いによってである。

二

「文化哲学」は、その第一部の巻頭からして意表をつくものである。「われわれは今、文化没落の徴候の中に立っている。大戦がこの状態をつくり出したのではない。大戦そのものはただ、この徴候の一つの現れにすぎぬ」（石原兵永訳）と言う。つまり、有り体に言えば、戦争によって文化が滅んだのではなくて文化が滅んだから戦争が起きたというのである。これは通常考えられがちな因果関係とは逆である。このことは既にして、文化とは何ぞやということについて一つの重大な示唆を与える。

文化は、ややもすれば、平和な状態が造りだした華やかな実りもしくは衣装であるかのように思われがちであるが、彼の言う文化はむしろ人間の生存と活動の根源にあるべき力であって、平和そのものをも造りだすべきエネルギーである。平和が文化の前提なのではなく、文化が平和の前提なのである。

三

ここで言うこの「今」とは、広く言えば二十世紀をその一部とする現代という時代全体を指すであろうが、厳密に言えば、第一次世界大戦勃発の時点である。なぜなら、ドイツ人である彼は当時フランス領コンゴの原生林の中で医療活動に従事していたので、一九一四年八月大戦勃発即日フランス軍の捕虜となり、その翌日からこの「文化哲学」を執筆し始めたからである。

勿論、彼が文化の問題を考え始めたのはこの時点からというわけではない。すでに十九世紀最後の年、二十四歳の時、現代文明について漠然とした疑問と危機感を持った。それは、十九世紀の人々が学問芸術科学技術における長足の進歩に自己陶酔しているけれども、何か重大なもの、根本的なものを失っているという危機感であった。翌一九〇〇年には文化の問題についてのはっきりした構想を抱き、以来、大戦勃発までの十五年間この主題について思索し続けていたのである。そうしてここで執筆開始以来さらに九年の時を経て、一九二三年、四十八歳で初めて「文化哲学」第一部と第二部を世に問うた。

しかも、それでまだ終わったのではない。文化についての建設的思索は九十歳の死に至るまで続き、「文化哲学」第三部は死後ようやくにして公刊された。人類文化の運命についての六十五年にわたるひたすらなる追求は、多才多芸な彼の業績の中でも異例のことである。危機感と使命感に促されてとしか言いようがない。

二　文化と倫理

一

「文化とは何ぞや」という自己設問に対しても、彼は意外な回答を与える。「倫理的なもの」と断言するからである。これは、美的・歴史的・物質的な考え方に慣れ親しんでいる現代精神にとっては不愉快な回答であろうことを、彼自身承知している。美的・歴史的・物質的な知識・能力・業績は文化の要素ではあっても、決して文化の本質なのではなく、また場合によって非文化的なものとなりうるがゆえに必ずしも文化的であるとも限らない。文化の本質は個人および諸国民の心的状態にある。人間のもろもろの文化的活動を、個人と社会の真の福祉に役立たしめるよう方向付ける心的状態、即ち倫理こそが、文化の本質である。この本質的なものが衰退するならば、文化は衰退する。文化の他のもろもろの要素は、これの代用をすることはできないし、これなしの文化は高まれば高まるほどますます非文化的なものとなる。

彼は、いわゆる「文化と文明」の、一方が精神的で他方が物質的であるかのごとき、相違を認めない。両者は本来同義であり、両者の本質はいずれも「倫理的なもの」であると主張する。彼はいつも、気の利いたことよりは本質的なこと第一義的なことに注目する、素朴な土臭い魂である。

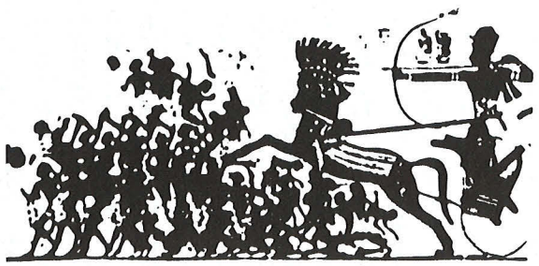
二

「倫理」あるいは「道徳」というと、特に私たち日本人には誤解を生み易い。よかれあしかれ、品行方正・人格高潔という孤立的受動的スタイルの面ばかりが重視されがちであるからである。文化の本質であると彼が主張する倫理とは、世界や歴史や生死との内面的関係・他者なる人間との具体的関係というダイナミックなものをその中心的内容として持つものなのである。

三

シュヴァイツァーは、衆知の如く、前世紀の代表的偉人の一人であり、多方面に優れた業績を残したが、その「文化哲学」は、彼の名声の絶頂期においてさえ、余り注目されなかった。偉人としての名声が薄れていく今世紀にあってはなおさらであろう。しかし私は、この「文化哲学」が今後ますます人類への貢献の意義を強めていくべきものであると信じるがゆえに、機会あるごとに拙い紹介をさせていただくのを光栄と思っている。

（にしざわくにすけ／清和学園理事長）



第十二回　高知出版学術賞

審査と受賞作品について

中内光昭

今回は、選考の最終段階で惜しくも選に漏れた作品をまず取り上げよう。

「漢の高祖でも秀吉でも天下を取らねば唯の人である。支那の大哲王充は其著『論衡』で人間に遇不遇のあるを論じ、賢不賢は才也、遇不遇は時也、エライ人が必ず出世するに非ず、マタイ人が必ず貧乏没落するに非ず、時に遭うと遭わぬとの相違だと断じた。之はカーライルの『大臣を択ぶは六ケ敷はない、二階からミカンの皮を投げて其が当たった者をすればよい』と云う思想と一致する。（略）萱野新作翁は私の友達の萱野長知君の父君だ。壮時鹿児島の私学校と連絡があり西郷と共に謀反を企てたが、故有て之を実行する事が出来なかった。即ち天下を取らぬ高祖や秀吉の亜流だが、しかし息子は立派に天下取りに成功し、支那革命に孫逸仙、黄興を輔けて、殊勲第一と云われている。（略）日本人で支那の革命を命がけでやった者は萱野君の外はない。萱野君は孫公から勲一等功一級を貰っている。（「土佐新聞」一九二五年八月）」

本文は推薦作品の一つ、久保田文次編『萱野長知・孫文関係史料集』中のものである。この史料集は極めて貴重なものと評価されたが、〝貴重な本が必ず受賞するには非ず〟という結果になってしまった。実は本書は第七回の受賞作品『萱野長知研究』のいわば姉妹編であり、つまり〝時〟を得なかったのである。

今回の推薦作品は二十点（重複推薦を除く）で昨年度と同数である。第一次の審査を通過した八点について、各三名の委員から提出されたコメントを中心に論議を重ね、次の受賞作品を選び出した。

脇口宏・友田隆士　編
「こどもの感染症ハンドブック」
（医学書院発行）

本書は、一九九三年に、高知医大小児科教室の故倉繁隆信教授を中心にまとめられた『小児感染症治療マニュアル』をベースに、同教室の現在の関係者が、最新の知見を加え、より簡潔に、より具体的に、「前書以上に実用的な一冊を目指し」て、まとめ上げたハンドブックである。

成人にとっては、いわゆる成人病（生活習慣病）が気になる昨今ではあるが、こどもにとっては感染症が依然重要な位置を占めている。こどもの多様な病気に対して、現場の医師が迅速に診断を下し最適の処置を施すことは決して容易なことではないと推測される。本書では各疾病ごとに、定義、病因、症状、合併症、診断法、治療、予防等、項目別に簡潔に説明し、処置法を示してある。

本書は、地域が誇るスタッフにより生みだされたものであるが、地域を超えて有用かつ信頼できる出版物である。現場での実用性に徹し、コンパクトに最新の知識が凝縮されていて、内容の取捨選択には学問に裏打ちされた細心の配慮が見られる。そのため、概読すると、自然界での感染者（細菌など）と被感染者（人）の関係がおぼろげながら見えてくる。本書は一般家庭でも有用で、医療の公開という面でも先進的な試みとして評価された。

中坊徹次・町田吉彦・山岡耕作・西田清徳　編
「以布利『黒潮の魚』ジンベエザメからマンボウまで」
（大阪海遊館発行）

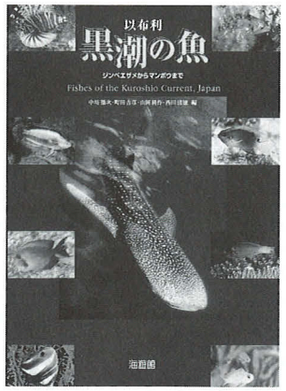
本書は次の三部から構成される。

第一部は、知名度の割に、あまり生態が知られていなかったジンベエザメとマンボウについての飼育記録や詳細な形態の記載である。第二部は、以布利近海の魚類の生態写真で、最近、潜水により撮影されたものである。第三部は、毎月一回、三年にわたり、高知大学、京都大学の院生が以布利に滞在し、大敷網を中心に採集した魚類の写真集である。

第一部の知見はオリジナリティーに富み、本書の目玉と言える。第二部は、すべてがオリジナルな写真で、幼魚の記録等も含まれ、学術的、実用的にも価値が高い。第三部は、新しい知見に基づく信頼できる図鑑と言える。

地道な努力が結晶した出版物で、コンパクトにまとめられ、学術的にも一般人の実用的にも便利なハンドブックとなっている。全体として、極めて美しいカラー写真で構成され、全文英訳されているので、足摺近海の魚類を世界に紹介するガイドブックとしても活用できる。また、いわば以布利を中心にした継続的な「定点観測」の記録でもあり、将来にわたる貴重な資料としても評価された。

「こどもの感染症ハンドブック」



「以布利『黒潮の魚』ジンベエザメからマンボウまで」

「土佐のカツオ漁業史」編纂事務局編
「土佐のカツオ漁業史」
（高知県中土佐町発行）

本書は（県に代わって）中土佐町が、「町おこし」の意味も込め、六年間の歳月をかけて土佐のカツオ漁業の過去と現代を総まとめした、いわば「土佐のカツオ事典」である。

広谷喜十郎、岡林正一郎、林勇作、坂本正夫、田辺寿男、若林良和の六名が分担執筆し、原始より現代までの土佐のカツオ漁業や関連産業、民俗等の変遷をたどるとともに、現在のカツオ漁業を国際的な視野からも眺めている。

キーワードは「カツオ」であるが、周縁部は広い。造船やカツオ節はもちろんのこと、新鮮なカツオを天秤棒でかつぎ、宇佐から荒倉峠を越えて雑喉場まで二時間で駆け抜けたという「夜売り」の〝実況〟まで、カツオにまつわるさまざまな伝承、記録、遺物等を丹念に収集し、考察を加えてある。記述は詳細、具体的で、読み物としてもおもしろい。中浜万次郎もカツオ節のにおいに包まれて育ったようである。

単に過去を記録するだけでなく、漁民へのインタビューなどで、現在のカツオ漁業の実態や問題点を明らかにし、さらに、カツオの種類、漁法などを世界的視野で解説するなど、将来に向けて多くの示唆を与える内容にもなっている。

一方、分担執筆を統合する総論や解説が欠けている点や、事典に必須の索引がない点が問題点として指摘された。しかし、カツオ漁業全般を網羅した、全国的にも貴重な出版物であることが高く評価された。

「土佐のカツオ漁業史」

審査は今井嘉彦、内川清輔、澤村榮一、田村安興、西島芳子、吉竹博の各氏と筆者で行われた。

（なかうちみつあき／高知大学元学長）

ドイツの娯しみ
―「音」編

塩見由利

ドイツに行って気づくのは、町がなにかしら静かであるということだ。人はたくさん通っているのだが、日本の町と違うものがある。その理由はしばらくしてやっとわかった。町に流れる音楽がない。スーパーや商店街で、日本では外にまでスピーカーをくくりつけて音楽を流してる。くぐもった割れた音でも、とりあえずにぎわいとして流していて、歩いているとあちらの音楽こちらの音楽がぶつかり合って聞こえ混ざることもしばしば。ドイツの町――に限らずヨーロッパの町では、いわゆるエスカレーターミュージックのようなBGMはあまり聞かれず、路上で聞こえるなど皆無である。

その代わりに路上ミュージシャンたちがいる。ドイツ人だけでなく、バラライカを持ったロシア人、ケーナを吹くペルー人グループ、どこの人かは不明だが大きなビブラホーンを引っ張ってきて演奏する人……あらゆる国の民族音楽やジャズ、クラシックがナマで聞かれ、いい体験だった。音楽学生が腕試しに出ていることもあると聞く。楽器の生の音というのはとても魅力的なもので、CDなどとは違う温かさがある。日曜日、店の閉められた商店街で（ドイツでは閉店法があり、基本的に土曜の午後四時以降と日曜日には通常の商店は開けてはいけないことになっている）あちこちの音楽を聴いて歩くのも楽しい散歩である。

夏のドイツでは、あちこちで野外コンサートが催される。公園や城の一角でステージが設置され折り畳み椅子が並べられ、会場のできあがりである。ドイツは緯度が高いため夏の夕暮れは遅い。九時過ぎまでほんのりと明るい夕暮れの中、涼風に吹かれながら聴く演奏はたとえようもなく快い。

ちなみに私はこれらの野外コンサートでお金を払ったことがない。ドイツ語には「ツァウンガスト（垣根の客）」＝コンサートを垣根にへばりついて聴く客、という愉快な単語がある。私がミュンスターという北ドイツの町に留学していた頃、世界三大テノールの一人といわれるパバロッティの野外コンサートがあったが、その時も私たちは垣根の客になって柵のシートの隙間から彼の写真を撮っていた……。

日本にいた当時は、クラシックといえば気取ったものと寄りつかなかった私だが、ドイツ人がTシャツGパンで深く音を楽しんでいる姿を見ているうち、純粋に音を楽しもうという気になってきた。オペラやコンサートも、国の助成金が多く取られているため割合安く入場券が手に入れられるのだが、大きなオペラハウスでもドレスアップした人は中央に座った人などごく少数で、多くは通勤姿のまま、大学に行くような格好のままだ。ミュンスター大学の講堂で行われたある市民コンサートでは、舞台にシュトゥットガルト管弦楽団のメンバーがセーターと普通のズボン姿でコントラバスまで自らよいこらしょと片手に提げて現れ（さすがのドイツ人もピアノだけは担いで出ては来なかったけれど）練習のような調子で演奏が始まったが、息のあった美しい音は私たちを恍惚とさせるのに十分だった。

ドイツの音楽の底力を見せられたのは田舎の教会のコーラスである。私がかつてホームステイしたことのある家庭を再訪したとき、お父さんがこの間から教会のコーラスに参加して練習してるのよ、と聞いてミサの折についていったのだが、小さな村落のアマチュアのコーラスであるにもかかわらず、その男声中心のコーラスはすばらしかった。男声のハーモニーはこんなにいいものかと思い知らされた。日本人のオペラ歌手の友人が、ドイツで声楽のサマーセミナーに参加したときにごく普通の主婦とかお医者さんがそこに参加していて負けそうなほどうまかった、というのを聞いて、さもありなんと思ったものである。

しかしクラシックを聴くドイツ人は年々少なくなってきてはいる。日本人と同じく若い世代にはロックやポップが好まれる。それでもどの町や村にも必ず素人ながらプロはだしの楽団があり、結婚のパーティーや祭りにはいつも生のバンドが入る。生の音楽のない結婚パーティーなんて、とドイツ人はみな言うだろう。ドイツの結婚祝いもまたおもしろいが、それはまた別の機会に。

町が静かだといろいろな音が聞こえてくる。風の音、鳥の声も町なかで聞くことができる。私が一番好きだったのは教会の鐘の音だ。先に述べたようにドイツの日曜は商店も閉まり静かな朝である。旧市街の石畳の道を三三五五教会に行く人々の他は人気もまばらで、広場にたたずんでいるとミサの始まる時間に教会が鐘を鳴らし始める。深い音がゴオン、ゴオンと鳴り出すと別の教会がまた違う音でディンドン、ディンドンと鐘を響かせる。四つ五つほどの教会が、あたかも呼びあうようにひとときき鐘を鳴らし続ける。その鐘が静まったあとの余韻もまたよい。

教会といえばパイプオルガンもすばらしい。ずらりと並んでいるように見えるパイプも、実は見えているのはごく一部で、全部で千数百のパイプが使われているという。見た目も美しくため息が出るが、その音は圧巻だ。まさに胸郭に、腹腔に響く。座っているベンチがびりびりとふるえる。しかしうるさくは感じられない。身体全体を包む深い音。教会ごとに全く音も違う。機会があれば是非体験してみることをおすすめする。

（しおみゆり／高知高専・高知女子大学非常勤講師）

これから須崎がおもしろい！

～鍋焼きラーメン快走記～

徳久和宏

行け、行け！
鍋焼き
ラーメン！

今、須崎市の鍋焼きラーメンが脚光を浴びています。子どもの頃から普段の食べ物として鍋焼きラーメンを食してきた須崎っ子としては、市外、また県外から鍋焼きラーメンを食べに来ていただいていることが嬉しく、またその数の多さに驚いています。昨年の六月に高知新聞で紹介されて以来、マスコミに数多く取り上げていただき、「須崎に鍋焼きラーメンあり」と県内はもとより日本全国の皆さんに認知していただいているんだなあと、マスコミの力の大きさを感じています。

簡単に鍋焼きラーメンについて説明をさせていただきましょう。土鍋や鉄鍋、もしくはホーローの鍋に入ったあつあつのラーメンでスープは鶏がら醤油ベースのものが多く、あっさりからこってりまで、お店によっては和風だしの店もあったり、具とのマッチングを売りにしている店もあったり、お店によりその味はさまざまです。鍋焼きラーメンと一緒にお漬物が箸休めに付いてくる店が多いのも、一つの特徴です。五十年以上前から須崎市内の食堂で出されていたという歴史があることも、鍋焼きラーメンの興味を引くところです。

現在、鍋焼きラーメンの専門店の他、食堂や小料理屋をはじめ居酒屋、喫茶店、お好み焼き店、焼肉店さらにスナックまで、いろいろなお店で提供されています。「この店が一番うまい」ということを真剣に議論をする熱烈なファンがそれぞれのお店にいます。いろいろ食べ比べると、お気に入りの鍋焼きラーメンのお店と出合えると思います。

須崎は漁師町の特徴をもつ、路地の多い町です。地図を片手に路地を行き、街の辻々にある、鍋焼きラーメンを出す小さなお店の訪ね歩きもまた一興でしょう。

須崎
鍋焼きラーメン
プロジェクトX

高知自動車道の延伸とよさこい高知国体が開催される平成十四年度を機に、高知県内はもとより全国各地からの観光客の皆さんに楽しんでいただける街の創造を、須崎商工会議所を中心に行政、市民と考えてきました。

須崎での暮らし、その一つ一つを見直してみると他にはない独特のおもしろさがあるのではないか、という地域の魅力の再発見の作業の中で、鍋焼きラーメンが注目されるようになりました。

今年の一月よりこの鍋焼きラーメンで須崎を売り出していこうという趣旨のもと、委員会が立ち上げられました。その名も『須崎鍋焼きラーメンプロジェクトX』です。

須崎商工会議所の松田健（たけし）さんがその仕掛け人で、現在十四名のメンバーと一名のオブザーバーの十五名で取り組んでいます。平成十四年四月からの本格的な活動開始に向けて準備をしてきました。

高知県出身の偉大なる漫画家の一人、やなせたかし先生に、鍋焼きラーメンを売り出していくためのキャラクターをつくっていただけないだろうかお願いしたところ、ご快諾いただき「なべラーマン」と須崎のシンボルでもあるニホンカワウソをモチーフにした「カウちゃん」という二つのキャラクターをいただきました。やなせ先生のイメージデッサンがファックスで送られてきた時、ちょうどプロジェクトXの会議中で、メンバー一同大変興奮したのを覚えています。その後須崎ケーブルテレビとの共同制作で、鍋焼きラーメンのお店紹介番組、「探訪・鍋焼きラーメン」もスタート。橋本知事夫妻にもゲストとして登場していただきました。お店のマップ、桃太郎旗など道具の方も着々と準備が進んでいます。こちらの字も、「ごっくん馬路村」などでお馴染みのデザイナー、田上泰昭（たのうえやすあき）さんにお願いしました。田上さんに「鍋焼きラーメンの鍋の底には須崎の路地裏の食文化が見える」と表現していただきました。

半世紀以上の歴史を考えてみても、鍋焼きラーメンは須崎の食堂の一つのメニューではなく須崎の食文化の一つである、まさにそのとおりだと思います。

鍋焼きラーメン
・魚・須崎の
通な暮らし

須崎の魅力の再発見の作業の中で、鍋焼きラーメンだけでなく、須崎には我々の自覚していなかった独特の食文化が存在することに気がついてきました。

天然の良港を持つ我が須崎市は、四季を通じて、おいしい新鮮な魚が豊富に揚がります。春には初鰹、夏にはシンコ、イサギ、秋には下り鰹、鯵、鯖、冬は鰤、またグレ、クエ、コウロウで鍋もよし。一年を通じて、魚好きを決して飽きさせることのないラインナップ、ローテーションで食卓を魅了してくれます。特に夏のシンコをブシュカンと醤油でいただくものなどは漁港に近いところでしか食べられない、港町に住む者の特権とも言うべきものでしょう。まだ食べたことのない方には、是非一度、夏に須崎の地に足を運んで召し上がっていただきたいと思います。

須崎の通な暮らし方をする男の人は、夕方仕事が終わると、その晩に食べる魚を自分で選びに魚屋へ足を運ぶ。そこで魚屋の主人のおすすめを聞きながら魚を選ぶ。この、「男の人が魚屋へ行くということは須崎独自の食文化ではないか」というのが、わが街のまちづくり委員会の矢野明広委員長の観察です。鍋焼きラーメン同様、魚の食べ方に関しても、真剣な議論に向かうということがしばしばありますが、このことからも須崎の食文化の豊かさを感じさせられます。

うまい魚で酒を飲む。ついつい飲み過ぎて二日酔い。しんどい午前中を過ごして、昼に鍋焼きラーメンを食べる。鍋焼きラーメンの熱いスープが二日酔いで弱った胃袋を癒してくれる。この時の鍋焼きラーメンは格別です。

これから
須崎が
おもしろい

今後の取り組みとして、プロジェクトXでは、物産展への出店や、ラーメンサミットの開催、お持ち帰り用鍋焼きラーメンの商品開発なども話し合っています。特に商品開発は早急に取り組まねばならないと考えています。

これからの取り組みにも是非ご注目いただきたいと思います。

鍋焼きラーメンを、地域おこしの足の速い一番バッターとして考えると、みごと出塁、それもツーベースかスリーベースかもしれない、といったところでしょうか。これに須崎のおいしい新鮮な魚、野菜、その他いろいろなものにつなげていければと思います。

これからも鍋焼きラーメンを通じて、須崎をおもしろくしていきたいと思います。まだ鍋焼きラーメン、夏のシンコを食べたことのない方、須崎市お立ちよりの際には是非一度お試し下さいませ。

（とくひさかずひろ／須崎鍋焼きラーメンプロジェクトXリーダー）

エスコーターズ日記 in文化高知

田子絵子

http://www.cciweb.or.jp/kochi/tmo/fr07.html

皆さんは真っ赤な衣装のエスコーターズを街で見かけたことはありませんか？

〝エスコーターズ〟は高知女子大学の学生グループで、高知商工会議所の中心市街地活性化の事業により昨年四月二十二日に活動を開始しました。毎週日曜日、午前十一時から午後四時半に高知市の中心商店街で挨拶・清掃・介助・案内などをしています。私の初出動は昨年の五月十三日で、あっという間に一年近くがたってしまいました。

私は活動中にデジカメで街の風景や人々を撮影してきました。レンズを通して見る街は、時にあたたかく、時に悲しく写ったりもします。というのは私たちの仕事のひとつである掃除をしていると、至る所に捨てられたゴミやタバコの吸殻が目につくからです。不燃ゴミが入った袋や弁当の食べ散らかしたようなものもありました。そこで昨年六月に、『ゴミのない美しい私たちの街が好きです』の横断幕を持って、ポイ捨てを無くそうと呼びかけるパレードを行いました。

また、どれくらいタバコの吸殻が捨てられているのか数え、ホームページの『エスコーターズ日記』で発表したり、商店街の代表者と検討してきました。その甲斐あって、以前より街はきれいになったと思います。

活動をしていてあたたかく感じること、それは人とのふれあいです。一年も活動しているので、エスコーターズを理解し、声を掛けてくれる方が増えてきました。いつも「ありがとう」と声を掛けてくれる大橋通のお店の方や、「お掃除してえらいねぇ」と言ってくれるおばあさん、そして最近は「テレビ見たよ」と同年代の若者まで声を掛けてくれるようになりました。初めてエスコーターズを見た観光客の方は「素晴らしいことをしているね。この活動はずっと続けてください」と応援してくれます。

ふれあいといっても、言葉を二、三交わすだけでなく、時には十分ぐらい話し込むこともあります。

はりまや橋公園にある、あるお宅では軒先に植木鉢がいくつか飾られています。季節が移っていくごとに、きれいな花が代わる代わる咲く様は、とても見事なものです。このことをエスコーターズ日記で報告しようとカメラを向けていたところ、ちょうど水をやりにお家の方が出て来られたので、花の世話のことや冬は日が当たらなくて困っていること、そしてエスコーターズのことなどを話しました。

真っ赤な衣装が素敵なエスコーターズたち

こんな風に、いろんな方とお話ができる機会なんて、普通の大学生ならまずありませんよね。地域の人がどんな風に商店街について思っているのか聞くことができますし、とても勉強になっています。県外の街づくり活動をされている方々、商店街について研究している大学生、はりまや橋商店街で活躍している高知商業高校の皆さん、そしてテレビやラジオ、新聞などのマスコミの方々。他にも出会った方はたくさんいます。

もっとさまざまな方の意見が聞きたくて、エスコーターズ日記の中に掲示板を設けたところ、たくさんの率直な意見をいただき、とても参考になっています。これからも、エスコーターズの良き理解者、良き助言者としてあたたかく見守っていただきたいです。

最後に、私は秋田県の出身ですが、地元以上に高知通になったと思います。第二のふるさととして、これからも高知の発展に貢献していきたいと思います。

『エスコーターズ日記』
http://www.cciweb.or.jp/kochi/tmo/fr07.html

（たごえこ／高知女子大学生活デザイン学科四年）

総合表現と私

川田弘人

先日、窪川から山間に車を走らせた。白や赤の梅の花が目に入ってきた瞬間、四万十川のあの蕩々と流れる水や車窓を横切る風景が一瞬止まったかのように見えた。もう、春なんだなあ……と、心も暖かくなっていくのを感じた時、梅の花は健気にも私たちに何か大切なことを伝えようとしているようだった。

さて、この日の私は、T小学校へ自己の研究として手がけている「学校ドラムジカ」の授業のお手伝いに出かけていた。「学校ドラムジカ」とは、簡単に言えば子どもたちが今まで出合った歌や曲をお話でつなげたり、サインマイムやダンスを加え、ミュージカルとしてつくり上げていくものだ。子どもの学びを演出する総合的な学習を展開できる新たな学習材である。「学校ドラムジカ」は、子どもたちが登場人物の気持ちを感じ演出や歌い方を考え、自らの思いを表現していけるよう教師が働きかけ、普段気付かない子どもたちの姿を引き出すものだ。最近は多くの学校で音楽の授業と総合的な学習の時間をリンクさせ、実践されている。

T小学校の子どもたちは、『学校坂道』という学校ドラムジカをつくり、入学した一年生、日常の学校の様子、卒業する六年生たちの思いを重ねながら演出を考え、一人一人が伸びやかに表現していた。少人数ではあるが、ともに助け合い、磨き合う姿が見られた。三月三日に発表があり、大変感動的で好評だったそうだ。今まで音程が正確でなかった子どもがしっかり歌えるようになったり、学年を超え、今までよりもっと仲良くなったり、とドラマのような出来事に担当の教員はとても喜んだ。私がこの研究を始めてから三年たつが、どの実践でも同様の感想がみられる。また、学びの主体が子どもたちにあることで、教師の指導観が大きく変化したことも一つの成果である。総合表現だからこそこういった結果になったと考えられる。

このような総合表現は、今までの学校ではあまり認められていなかったように思う。私自身、オペラに出演してきてはいても、学校教育に積極的に導入するという考えはほとんどなかった。しかし、数年前から市民ミュージカルや児童劇団「高知リトルプレイヤーズシアター」の活動のお手伝いをするようになり、人が輝くことの大切さを感じ、今、総合表現がとても大切なものだという認識をもった。以来、学校に総合表現を取り入れるために、どうすればよいかを考えてきた。子どもたちが生活経験を生かし、思考と組み合わせ、知を結び、自らの表現に自分なりの答えを見つけていくことができれば、今後の生活の中で、他人の気持ちをとらえたり、自己決定の概念をもつことができ、行動に結びつけることができる。舞台芸術という総合表現を通して「感じる・考える・思う」の概念を自己の中で確立し、本質を見定め、具体的な行動に結びつける仕組みが現代の社会を生きていくためには特に必要だと考える。

今年高知市では、国体に関連しスポーツ芸術部門として「鏡川ファンタジー　花咲く鏡とお星さま」と題する児童ミュージカルが制作される。落成した高知市文化プラザ「かるぽーと」で五十名の子どもたちが舞台いっぱいに演技・ダンス・歌を披露する。この催し物を通して、子どもも大人もともにパワーを出し合い、感動できるものになればいいと思う。今からがとても楽しみだ。

今回でこの連載も終わる。これからの文化の在り方について、いくつか提言をさせていただいたりもした。読者の方々はどう受け止めてくださったただろう。

（かわだひろひと／高知県教育センター指導主事・川田声楽研究会代表）

高知を撮る　第17回写真コンテスト入賞作品

元気な裸の仲仕達（昭和29年　高知市）

横川宝喜

中の島と若松町に挟まれた堀割の堀川の上流まで、伝馬船で運んできた砂利をモッコで荷揚げする裸の仲仕たち。

〈ゆかり〉発言

風俗歳時記

一連の新聞報道によると、天皇陛下の〈ゆかり〉発言によって、日韓関係が好転しているという。

この発言は、昨年十二月、天皇誕生日の記者会見の場でなされたもので、「桓武天皇の生母が百済の武寧王の子孫であると続日本紀に記されていることに、韓国とのゆかりを感じています」という内容。

この発言には、政府筋の関与の形跡はなく、陛下が率直な考えを述べることによって、こじれた日韓関係を好転させた形である。

『続日本紀』（七九七）によると、桓武天皇の母であった高野新笠は、百済の武寧王の後裔とされる和氏の出身であり、渡来人氏族の血脈につながる人であった。

帝が即位した七八一年には、皇太夫人と呼ばれ、正三位に叙せられた。

また、帝は、夫人の父も正一位に叙し、叔父を参議に任命するなど、和氏への配慮にはなみなみならぬものがあった。

渡来人氏族との血脈のまじわりは、王家のみならず、名門貴族の場合にも見られる。

たとえば、名門藤原家と新羅系渡来人である秦氏との間にも、婚姻関係が成立している。

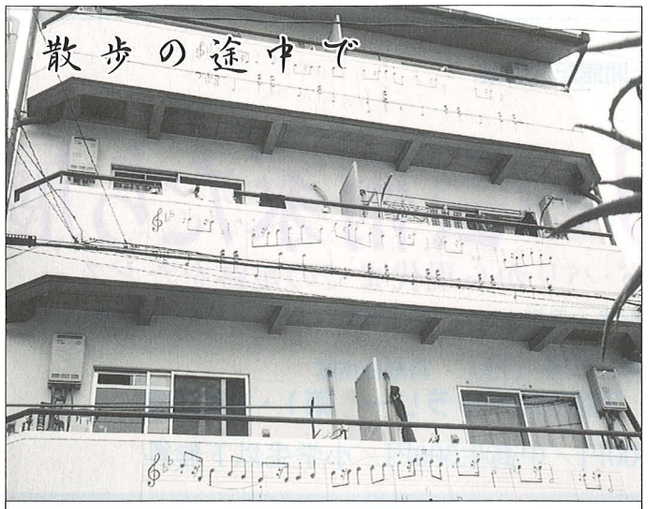
秦氏は絶大な財力と、優れた技術力を有し、桓武天皇の平安遷都の背後には、秦氏の活躍があった。

秦氏は、その本拠地であった、京都の山城地方から、その後、全国各地に進出し、周防（山口県）の大内氏も、土佐の長曽我部氏も、秦氏の子孫であることを大いに誇りにしていた、という。

渡来氏族には、以上のほかにも、王任氏系、漢氏系、紀氏系などがある。

とすれば、王族・貴族にかぎらず、私たちも、いつか、どこかで、渡来人たちの血脈を継いでいると言ってもよかろう。

（上田正昭『帰化人』、他）（朴）



さて、ここでクイズです。かなりの難問かもしれません。
街角で見かけたこの譜面、いったい誰の何という曲でしょう。
みごと正解を答えて下さった方の中から抽選で一名様に、この曲のＣＤを担当者のポケットマネーでプレゼントします。ご応募は、文化高知担当へおハガキで。

風伯

ＢＳＥ（牛海綿状脳症）

草食動物の牛に、肉骨粉という名の動物性食品を与えた結果が、これだった。恐ろしい話だが、話はそれに留まらなかった。偽のレッテル張りが次々と明るみに出て、今や食品一般に、不信の念が渦巻いている。

随分昔のことだが、畜産施設で研修に参加したことがある。肥育牛の生産も大きな課題だった。牧畜には不向きな山間だったが、傾斜地の放牧は、かえって良質の牛を育てる、などと提唱されていた。

そんな中で、麩や燕麦といった飼料に混ぜて、粒状の尿素（窒素肥料）を与える、というプロジェクトが実施されていた。飼料に肥料とは、と驚いたが、栄養学上の蛋白質摂取量に、効率的なのだといわれた。反芻動物の胃腸は特殊だからという説明だった。

果たしてあの研究結果はどうなったのだろう。その後の話はつまびらかでないが、一事が万事、効率的、合理的、経済的という時代風潮は、益々強くなったと思う。

インスタント食品が出回り、添加物への不安も枚挙にいとまがない。まさか「街で安心して食べられるのは焼き芋だけ…」などという日にはならないでしょうね……。

（3）

賛助会員募集中

年会費2000円で
どなたでも入会できます

ご入会いただくと……

「文化高知」を年６回
　お手元にお届けします。

事業団発行の書籍を
　10％割引いたします。
（事業団で直接お求めの場合）

お申し込みは……
事業団にお電話でどうぞ。
次号に郵便振替の用紙を
同封してお届けいたします。

今号の表紙

「森のビーナス」　藤田京子

―心のままに―

早明浦ダムへお花見に出かけた時、湖面に映る山脈と桜の花がとても印象的で、その時感じた気持ちを素直に描いたものです。現実離れしているかもしれませんが、私にとってこれが現実なのです。

これからも現実と心から感じる絵を描いていければと思っています。

（ふじたきょうこ）

文化高知 No.107 [隔月発行]
2002年(平成14年)5月1日発行

財団法人 高知市文化振興事業団
〒780-8529 高知市九反田2番1号
TEL(088)883-5011(代表)/郵便振替01680-5-14869

高知市文化プラザかるぽーと開館記念事業

華やぐパリの芸術家たち展

～印象派、エコール・ド・パリから現代までの足跡をたどる～

モネ・マネ・キスリング・フジタ・モディリアニ等31作家、81点の作品を一堂に展示

好評開催中　～5月26日（日）　月曜日休館
高知市文化プラザ 7階市民ギャラリー　第1・2展示室

観覧料　一般1,000円／中高生500円／小学生以下無料

La splendeur de Paris et ses artistes

■主催:高知市・(財)高知市文化振興事業団　■事業に関するお問い合わせ／(財)高知市文化振興事業団 TEL088-883-5071

http://www.i-kochi.or.jp/hp/bunshin　E-mail bunshin@i-kochi. or. jp